

宮森千尋先生の「既習事項をもとに、自らの言葉で意欲的に学びを深めようとする児童の育成」について

愛知教育大学 高井 吾朗

宮森先生のねらいは、小学2年生の段階から既習事項を意識した学びを行うことにより、解決方法の妥当性について論拠をもって考えることができるようになることがねらいである。その方法としては、身近な内容の教材、ペアやグループによる考えを伝え合う活動、そして、前時との比較による根拠をもった説明の3つである。

この3つの方法は、身近な内容の教材により関心を持たせ、グループによる伝え合う活動により解決への意欲を高め、よりよい説明として既習事項を用いた説明を行うという態度を育てるという流れである。関心意欲態度は、前回までの学習指導要領の評価の観点であるが、今回の評価の観点である学びに向かう力、人間性等もこれまでと同様に、関心で留めず、意欲を持たせて、態度を養うというものであり、宮森先生の提案は、現在の目標に対して、適したものになっている。

実践の内容としては、既習事項である $27+2$ と新たな学びである $27+3$ の共通点と相違点を考えさせることにより、どこが既習事項と違い、新たな学びとなっているかを児童に考察させている。その際に児童は10の束になっている棒とバラの棒を使って、7と3を足すと10になって1のかたまりじゃなくなると指摘している。1の位が10の位に変わっていることを理解させるためには、バラで10本あるということではなく、10本をにぎるなどして、束になったという操作的活動をさせる方が効果的であろう。

式で $3+7=10$ と示した場合、桁が変わっていることに着目しているかどうかを判断することは難しいが、こうした操作の違いに着目することにより、児童が10を桁が変わったと理解しているかを判断する材料となる。こうした操作的な違いを、ペアやグループにおいて説明し合っている中で教師から指摘したり、発表においてその操作の違いに着目させたりすることにより、前時との違いだけでなく、10の束という具体的な既習事項と関連付けることが可能となる。

小学校低学年においては、自身の経験から一般的な方略（例えば、勉強するとテストでよい点数が取れる、昨日やったことと似ているなど）を使うことは可能だが、既習事項を具体的な方略として捉えることは難しいとされている。故に、教師から算数に固有な方略を意識させる指導や支援が必要であり、上記のようなどこがどのように違うのかを具体的に指摘できる場を作ることが重要である。